

美に於ける東と西

山 川 義 夫

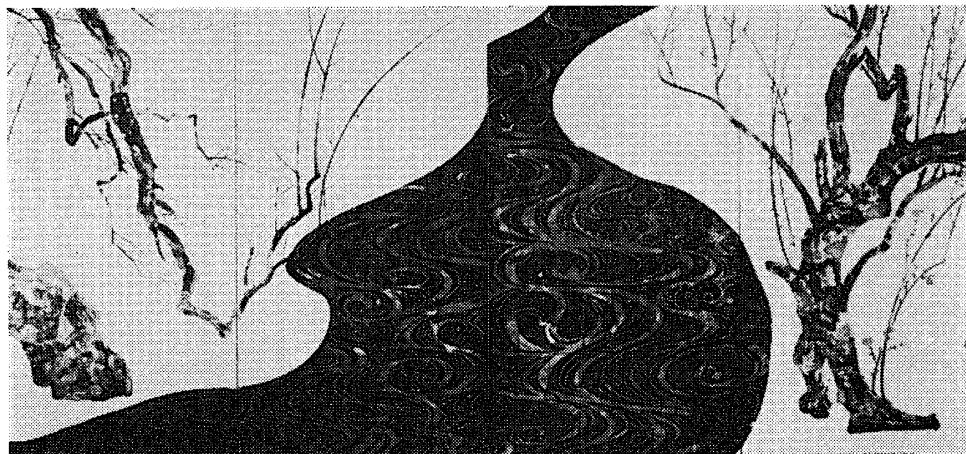
芸術的体質と云う面から東洋と西洋のあらわれ方を眺める時に、そこに相当大きなタイプの違いを見い出すが、これは使用された材料・用具の相違と云った点もさることながら、それぞれの芸術を生み出した民族の血の違いが彼等の志向する芸術に表われたものであると云って良いであろう。

此の場合東洋とは云っても吾が日本を主に扱う事とするが、大雑把に東と西の美に於ける体質の違いを取り上げれば、それは理性と感性と云った相違であり、又それは科学性と悟性との違いと云っても良いかと思う。

何故にかような両極を行く結果と成ったものであろうか。此の問題を解明する前にもう少しそれぞれの美の特色と云ったものを挙げて見よう。

日本美術の特色は

1. 甚だ淡白な表現が多く繊細である。
2. 受容的性格であり第二藝術的である。



尼形光琳 18世紀 紅梅白梅

3. 変化に富んでいる。
4. 形而上学的である。
5. 日本美術は装飾的である。
6. 情感にうったえ湿润である。
7. 自然没入的である。
8. 菲計画性。

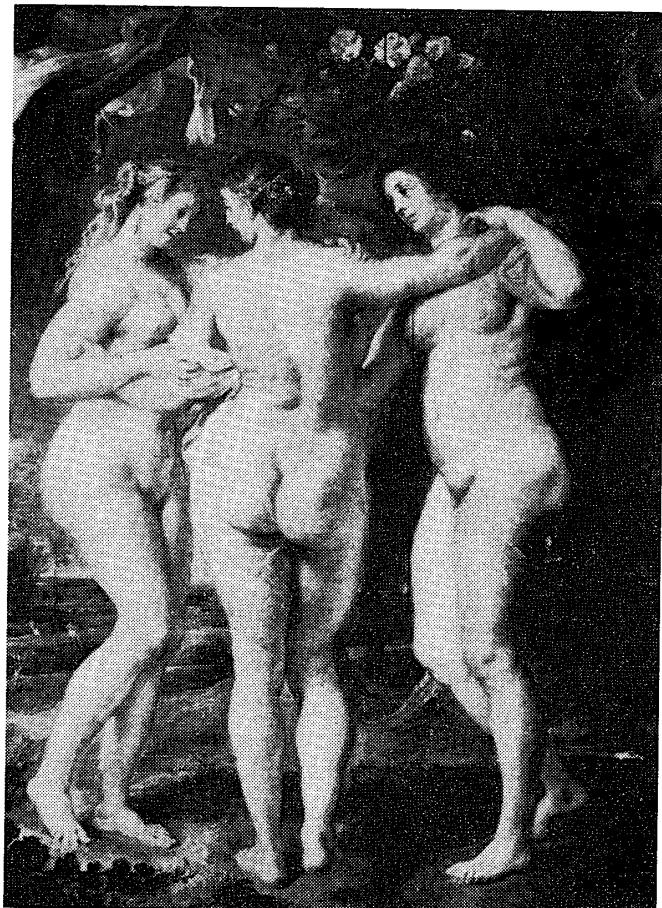
西洋美術の特色は概ね日本の場合の裏返しの如き様相を呈して居るが、これを列記してみると、

1. 実在感があり即物的裏づけがある。
2. 能動的であり第一藝術的である。
3. 脂っこいものが多く、執拗に迫って来る。
4. 刻明に終始し具体的である。
5. 自然と自己とを切り離し客観視する。
6. 合理的な計画性がある。

以上の様に対蹠的な美の特色が見られるが原始美術に於て既にその方向を異にする歩みが見られ味興深い。即ち紀元前2万年頃の旧石器時代の人間が描いたスペインのアルタミラ、南仏のドルドーニュ地方の洞穴の壁画のモティーフは馴鹿や野牛であるが、これらは極めて写実的に、生き生きと表現されている。

この壁画はルネッサンス以降の絵画の様に鑑賞が主目的ではなく、宗教上の必要から制作されたとか、彼等古代人の生活上の需から描かれたとか種々推測されるが、然し制作上の動機・

目的は暫くおくとしてそれらの



リュベンス 17世紀 三 美 神

洞穴画から受ける感じは甚だバイタリティに富んでいる事で、奇しくも吾が古代美術の一つである埴輪が、貴人の死と共にその従者を生きた併一諸に埋葬していた風習の代りとして登場して来たと云う経緯からか貴人の死を悼む表情が埴輪を物悲しく又或物は茫然とした顔にしたし、西洋の洞穴画のリアルな実感を呼ぶ作情とは裏腹に、茫洋と象徴的ですらある。美の出発点が既に異なりそれぞれの道を歩む東と西の芸術が相容れぬ結果と成るのも止むを得ぬ事かも知れぬ。吾国の中墳は古墳の周囲に埋められたり、置かれたりしたのであるがこれは死者の為のものであり、欧洲の洞窟画が生きている現世の人間の為のものであるのに比較すると、死後の世界と云う漠たる存在の範疇であり、未だ生命のある人間には実証する術のないあやふやな領域である。しかも死と云う機会が訪れるとそれが自分達の身近かな處に居た人である丈に一層悲しいわけであり、無常感に陥り陰気な気持の併に埴輪を作り死者に供えると共にその墳墓を守らせようとしたものであるから、埴輪の表情が泣いている様であったり、茫洋としてとらえ処のない感じであるのは至極当然なのであろう。

他方西洋の洞穴の壁画を制作した原始狩猟採集民に取って、美は死者や死後の為のものでなく、現実に生命ある彼等の生活の為であって、動物を捕えて食事の用に供さねば人間の生命は保たれぬのであり、武器等も現代の吾々からは考えられぬ程無力なものに過ぎなかったから、動物の攻撃の前に命をおとした人間も多数居た事であろう、動物は食事に供されたり、その毛皮等が彼等の身体をおおって衣服と成り寒暑をさえぎり、山野をかけめぐる人間の身を保護する時、それは無上の天の恵みとは成るが、一度動物が人間に死をもたらす時、それは残忍なる地獄の使者ともなったものであろう。原始狩猟民達がふるい立つ様にして旺盛な闘志をかき立て、日夜念頭にあるものは動物の姿丈であるのは尤である、かような性情に基づいた作画であって見れば洞穴の壁画が迫力に満ち、躍動するバイタリティの故に、たった今制作されたかの感じを持つのは当然であろう。

この洞窟画には動物がほとんどで人間は稀にしか登場しないが、描かれた人間も人間の姿その併と云うのは皆無で、すべて動物の真似をし、頭に巨大な駒鹿の角をつけ、腰には尻尾もつけ、勿論動物の毛皮を身体にまとめて居る圖であるが、顔は猿の様な感じが多い。此の様に人間が人間の併でなく、動物仮装の状態で表現された作画ばかりであると云う処が絵画制作の動機を解く一つの要点とも成るものであろう。

牡の動物の仮装は発情期の牡を引き寄せる為であり、又或動物の仮装はその動物と闘おうとする他の動物を呼ぶわけである。この絶大な効果が動物達の本能に依るものであるのは勿論であるが、仮装の不思議を目のあたりにした原始人は、この仮装自体

に素晴らしい呪術力があると信じこみ、かくて呪術的宗教等の要求から作画されて行ったものであろう、彼等の生活がかかっている丈でなく、現実生活を豊にして呉れる呪術宗教ともかかわりを持つわけであるから、熱意を込めて制作し其のが極めてバイタリティに富んだものに成ったのは自明の理である。

片や強力に生きる為の美術であり他方は死にまつわる美術である、生命の讃歌を唄い上げる彼に対し、虚しさに打ちひしがれる吾である、日本の美の湿っぽいものや形而上学的なものに移行して行く要素が既に芽生えて居るのだ。尤も埴輪の人物も泣いている顔のものばかりではなく、素朴単純で大らかな造型を見せ、のびのびとして温かい生活感情に満ちて居るものも多く、明るさ優しさを感じさせ人間の性は善である事を思わせるが、この簡素で柔軟な大らかさを持つ味わいは後に続く日本美術の源流となるものであると云い得る性格のものである。

一体日本美術とは如何なるものであろうか？此の問い合わせに対して一言で答えるのは甚だむづかしい事と思われる。1958年、日本美術を一まとめにして見せようと云う展覧会がパリ、ロンドン、ローマ等ヨーロッパの主要都市で催されたが、日本美術と云えば浮世絵版画の北斎、歌麿、広重と云った画家を連想していた西洋の人達に日本美術の幾つもの流れのある事を知らせ、日本美術の特色を彼等に新しく印象づけたわけである。

だが、この展覧会は日本の種々様々の時代の美術を一堂に集め、羅列的に見せたことに依って却って日本美術に対する大きな疑問をも起させたようである。

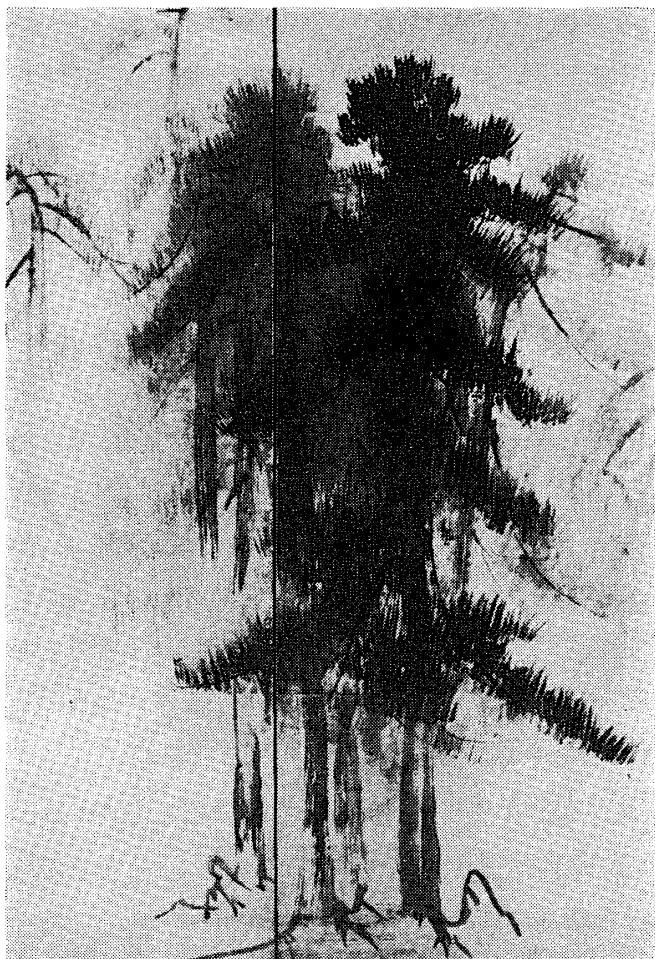
吾国の美術は大昔から現代に至る迄に種々さまざまな様式があるが、その幾つかを挙げてみると、古代の縄文式土器と埴輪の美術、次の仏教美術、平安朝の貴族文化である大和絵、室町以後に起る水墨画、桃山時代の豪華な障壁画、江戸時代の琳派、南画、浮世絵、円山四条派、更に現代の油画と日本画の平行状態、この吾々の美術は様式的に随分と違いがあって一貫性にとぼしく、時代に依っては全く無関係に偶発的に発生した感じが多く、西洋の人は、一体日本美術の特色は何であるのか、日本人が誇り得る美術は大和絵であるのか、或いは琳派か、水墨画か、どれがほんものの日本画か分らないではないかと思ったので、ヨーロッパの或批評家が疑問に思う発言をしたのも極めて当然であったと思はれる。

併しどの様式が真に日本美術を代表するもので、他は重要でないとする事は不可能な事であり、むしろ此の変化に富んだ様式を一まとめにして日本美術の特色であると云うのも過言ではない。先に東と西の美の特色を列記したが、これをたった一言で尽すのは困難であるが、1958年のヨーロッパの諸都市に於ける日本美術展で錚々たる日

本画の名作を欧洲の人達が見た時に如何なる感じを抱いたものであろうか、石づくりの欧洲の大建築の堂々たる堅固で荘大なる風景に包まれた日本美術の名作は皆一様に柔軟優雅に見えた事であろう、我国の美術の中でも特に豪華荘大であると云われている桃山時代の傑作があの欧洲の街の中では如何に可憐で優雅なものに見えた事が想像に難くない事である。日本の美術の中に流れている大きなものは最も豪華で荘大であるものでも西の世界の中では可憐で優雅な系列に入ってしまうのである。いわば吾国の美術は植物的であり、可愛い花もつければ風が吹けば風に身を任せてこれにさからわず従順であり、四季の移り変りに無理なく順応し、葉を茂らせ、秋には錦と見まごう様を見せて飾り立てるが、凋落の冬にはすっかり己を潜めて来るべき春を心待ちするのみで、自己の気持の如きに山野をかけめぐり弱肉強食を事とする動物世界とはつきり次元を異にするのである。

初めに挙げた如く日本美術は淡白で纖細であるがそれは如何なる理由に基づくものであろうか、一番大きな条件は我国の気候が極めて高い湿度の故に梅雨時から夏は無論、秋さえも西欧諸国とは比較に成らぬ程であり、むしむしする暑さが繰り返す勢い食物も脂っこい物を避け、あっさりした淡白なものを小量とる丈であって見れば万事根気も続かず気質も淡白と成らざるを得ず、こう云う気候風土のもとに何万年も先祖代々生活して來た日本人はどうしても植物的人間に成ってしまったものであろう。人間偉そうな事を云って見ても矢張り自然の子供であり、一時はこれに逆らっては見ても何万年も大自然の作用に逆らい、宇宙の運行を無視すると云う事は不可能であり、ナンセンスである。

淡白な植物的人間が出来る気候風土にあって絵筆を取れば出



長谷川 等伯 16世紀末 松林（部分）

64 札幌大学紀要

来る作品又作者の氣質を反映して淡白な味わいを生ずるのは自明の理である。

欧洲の人々が大体バイタリティに富み、能動的、動物的であるのは先づ我国の氣候風土と異なり、湿度が少なく、からっと乾いた氣候の故に寒暖計は三十度を越えても日本程暑さが苦にならず、木陰や建物の陰では快適な涼しさを覚えると云うのは日本人旅行者の一様な実感である。むし暑さの為に食慾がなくなると云う事も無いし、彼等欧洲人の食事の量も多く、レストラン等で出る食事の量の多いのに驚き、食べ残すのは日本人旅行者ばかりで、ヨーロッパの人達は悠々と平げ、しかも動物蛋白の摂取量が日本人に較べて遥かに多い事である。西の人々がバイタリティに富み動物的果敢さで積極的に行動を起し、強力に自己を守るは勿論、他に戦いをいどみ、他民族を隸属下に置いて迄も自己の富や権力を大きくしようとする歴史が何万年も続いている故に、画人又筆を持って制作する時に自らバイタリティに富み、脂っこい作品を創り上げるものであろう。

欧洲人の積極果敢な動物的氣質は併し乾燥した氣候の下に生活して居るから食慾を減じないと云う丈でなく、地続きのヨーロッパ大陸に在っては何時外敵の侵入を受けるか分らず、ぼやぼやすると自分達は皆ほろぼされるからうっかり出来ぬわけで、攻撃は最大の防禦なりと云う処から先づ機先を制して周囲の異民族をやっつけようとする気持ちが永年の間に西欧人を能動的積極的氣質にさせ、藝術に於ても他民族を凌駕する優れた作品を生まんものと努める故に西の彼方には能動的な藝術が生れたものであろう。

又ヨーロッパの美術には実在感があつて即物的裏づけがあるのは何故かと云えば、今述べた処と多少重複する個処もあるが、彼の地は湿度が低く乾燥している為に遠くの物迄はっきり見える事であり、視覚的に明瞭度が増すと云う事は外面的観察が容易な事であつて種々の現象をはっきりとらえ認識する事が可能と成るのである。

ヨーロッパの美術にも種々のイズムが擡頭し、中には怪奇幻想と云つた内容を扱うものもあったが、併し表現技術と云う面からそれらの作品を眺める時、矢張り実在感があつて物を物としてはっきり表現して居るのであり、何があるのか無いのか分らぬ様な何様が在りますかは知らねども神々しさに頭が下る等と云つた東洋的表現とは異なるもので終始されているのである。

更に西洋の美術にはマテリアルの美と云うものが主要な地位を占めて居るが、これは東の精神性と対比され得るもので、マテリアルの美と云うものは畢竟、物質の有難味が充分信頼性のあるものであり、彼等西欧人の幸福や期待を裏ぎらぬばかりか、彼等の人生と共に永い間歩みを共にし、物質のある所即ち彼等の幸が約束される所で



ヴェラスケス 17世紀 マルガリータ王女（部分）

その丘全体が頑丈な岩盤であり、日本の様に地震の脅威もなく、大昔からの姿を悠々と見せて呉れる故に、ロマンチックなギリシャ神話にまつわる此の建物と云う物質が甚だ信頼性のあるものであって、西の人達の生活を大きくささえて呉れるものである事を大昔から存在している此れら数多の建築物は明示してくれるのだ。

欧洲でも森林の多い北欧には木造家屋も見られるが、大体石造りの家が多いと云うのは先にも触れたが、何と云っても大陸である為に容易に外敵が侵入し得るので、放火その他に依る家屋損失を防ぐ意味で石の建物が多くなったのであろうが、それは又建築に適した石材が豊富である事も原因であろうし、イタリー等には立派な大理石の産出も多い事から嘗て優秀な彫刻家をあの附近に出現させたし、現代に於てもイタリー彫刻家の中に立派な人の存在し得るのは、良い石材に恵まれているからに外ならない、兎に角石の家は人間の財産として残し得る価値があり、外気温にも左右され難いし、家そのものが焼けねば家の中にある財産等も失い難いと云う利点もあり、物質は西欧人に取って頼り甲斐のあるもの最たるものであるのも当然の事であろう。

これに引きかえ我国に於ては物質性・即物性より精神性が見られ、精神の深い美は

あって、西欧人の思考の中に物質性の美が主要な位置を持つのはあながち不思議ではない。即ち石造りの住居は燃える事もなく耐久力も吾国の木と紙の家等には比較出来ぬものがあり、しかも歐州の地盤が大体岩盤が主で、家はがっちりした岩盤の上に建って居るので基礎のしっかりして居る事此れに勝るものは無いのであり、一度住居が作られると子孫に残して代々伝え得るのであって、此處に富の蓄積継承と云った事が容易であり、物質は人間の生活上信頼し得る唯一のものと成り得るのだ。

実際アクロポリスの丘に建つパルテノン神殿を眺める時に、

66 札幌大学紀要

物質の美を乗り越えもっと高い次元にあるものとされている。この当否はしばらく擋くとして精神的風土なるものをみつめて見たい。

東の精神的美学を生み出したものとして私は又しても湿度の高さに言及せねばならない。

日本に於ても吾が北海道はその外に出る事と成るが、實際京都の近辺を歩いて見て驚くのはあの附近の風景が日本画その傑である事で、東洋の美術は一體に主觀が強く形象・現象を超えた内奥的なものの美の追求に重点がおかれているとは良く言われる事であるが、今作品そのものの内容に深い精神性・内面性が表現されているや否やを問わぬ事にして日本画に表われた表現技術としての面から、山水画に描かれた樹木や山等に目をやると其事が京都の辺りの風景の感じと余りにも似ている事で、特に霧が立ちこめ、其処に幾本かの樹木が浮かび出て、樹木の彼方には山がある様でもあるがそれは明確なフォルムを持たず、山の一部を見せるが他の大部分は霧の中に没して定かでない。恐らくこの辺迄は山があるのだろうかとも思い、併しここから先は一體何がどうなっているのやら皆目見当がつかぬと云った手合いで、總て霧の為に明瞭性を失い、西の人々の如く物質の外側を綿密に観察する等と云うのは至難の業で、肉眼に依る世界把握は不得手となるから自ら心眼を開かねば成らず、此の事は相当に技術の習練を積み重ねる丈でなく、可視的世界の向うにある不可視世界を透視する宗教家の洞察力をも必要とされるもので、丁度盲人が不自由さの余り身体の他の機能、例えば聴覚等の発達を見る様なもので、明瞭に客觀視出来ぬ高い湿度の為に視覚を超えた理解の道を歩まざるを得ない東の美学世界が其処に生じたのである。

それは又、先にも少し触れたが、我国に於ては住居は木と紙から出来て居り、当然の結果として燃え易いし、更に世界に名高い地震国、台風国であって見れば物質はなんと頼り甲斐のない、当にならぬ存在であるかはヨーロッパの事情と考えあわせると一目瞭然である。

かくして物質は日本人の信頼を失い、物質以上の高度な存在として深い精神生活の希求からそれが形而上学的發展えと移行されて行ったものであろう。

面白い事には物の落下現象からでも西と東では受け取り方が全々異なり、例えばリンゴが風のない時に落ちたのを見て不思議がったニュートンは思考を重ねて、やがて万有引力の法則えと導いたが、吾国に於ては、片桐且元は桐一葉落ちるのを見て、其処から天下の秋を感じると云う知性と感性との相違を示すのである。

斯様な相違点は一體何故に起り得るのかと云うに、先に挙げた湿度の高低の差や物質觀も勿論であるがより大きい原因は其の気象状況の異なる事である。

一体科学が発達するのは同じ現象が繰り返し行われるからであって、同じ状況の繰り返しから物の原理・法則えと導くのは容易であろうが、我国の天気の様に絶えず変る女心の様に変化して予測をゆるさぬ地域では大体科学的精神を生み出すものとは程遠いと云わねばならない。天気予報は当らぬ為にあるのかとさえ疑いたく成るが、我々の生活は天気の挨拶なしには会話も文通も成立しないと云う程気候・天気は重大関心事なのである。此れは天気に悩まされる日本人の生活を意味するので、日本位の気候の難所は世界にその例を見ないものである。

先づ決定的な悪条件は、日本列島の中央を通る山脈が気候を東西に縦割りにしているが、山が多い地形と、入り込んだ複雑な海岸線が気象変動を大変に多く起させ、空模様を甚だややこしくしてしまうことである。

先年富士山の東側で旅客機がばらばらに成って墜落したが、これは偏西風が富士山の東側で乱気流を生じ、この乱気流に依って飛行機が破壊されたわけだが、気流が乱れると云うのは富士山の東側に限らず、それは如何なる山の陰でも起り得る事であるから日本と云う国は乱気流の専売局の様なもので、天候の激変は至極当然の出来事である。

悪条件のもう一つは、アジア、ヨーロッパと続くユーラシア大陸と太平洋との間に細い帶の様に日本が横たわっている事である。当然両方からの気象変動の影響を往復共に受けねばならなくなる。夏は海洋気団の天下となるが冬は大陸からの気団におおわれる。これが季節風であるが、両気団の交替の時期がツユであり、又秋の長雨をも齊らす、此の現象は外国人には珍しいので外国语にはツユに当るものが無く、英語でも『BAI-U』と書かれている程である。

更に悪い事に大陸の東側は東岸気候と呼ばれ、西側よりずっと不利な気象条件の下に置かれている。地球の大気は西から東へ大きく循環して偏西風と成るが、大陸の東側では冬大陸内部の地表が冷えて出来た高気圧の冷たい空気が偏西風に強められて吹きつける。逆に夏は南の海の高気圧が大きく発達して高温多湿な風を送って来る。この為大陸の西側に比較して冬は寒く、夏は暑過ぎる。又周囲が海のため雨雪が多い、冬大陸からの冷たく乾いた空気は日本海を渡る時に暖流で暖められた水蒸気を沢山吸収して、日本の山脈に突き当ると上昇気流となって急冷され、北陸地方に大雪をもたらす、積雪量が8米と云う世界でも例を見ない程である。そして雪を降らせて再び乾いた空気は太平洋岸へカラッ風と成って吹き降り火災の悩みでヒヤヒヤさせる。雨の場合は日本付近は冷気団と暖気団の境の前線が出来やすく、南方気流が前線の南側に高温多湿な気流をもたらし、年間平均1,800ミリの雨を降らせる。少ない地域で1,000

68 札幌大学紀要

ミリ前後、多い地方は4,000ミリも降る。外国の例ではパリが年平均600ミリ、ロンドンで700ミリ、ニューヨークで1,000ミリ、これが普通なのであるが、更に加えて日本には台風がやって来る。台風は日本、中国方面を襲う熱帯性低気圧であるが、年間60位発生する世界の熱帯性低気圧のうち30近くが日本を訪れ断然他を圧していく。

又日本列島は温帶にあるとは云うものの、南北に随分と長くのびている為に、この地域の寒暖すべての段階の気候をすべてさらけ出し、大雨、干ばつ、冷害と云った気象状況が各地でバラバラに雜居している。

斯様な極めて予測し難い気象の変化が常に日本人に襲いかかる為に、不測の障害が何時如何なる形で訪れようとも、其の与えられた状況に対して素早く行動せねば生活上種々の不利益を蒙るばかりか時には生命の危険さえ齊らされる。従って多くの経験や失敗の積み重ねを以て鋭敏な予感の感性が養われるわけで、日本人の芸術には科学的合理性と云った面に欠けるが、感受性の豊かさとか形而上学的に発展し得る素地が此処に生ずるのは当然である。

一期一会の思想等は誠に日本の発想と云わねばならない、人間誰しも生涯は只の一度であるが、何事もつきつめて行けば、万事一生涯に一度の事でないものはない。毎日毎日あらゆる事が新規な出来事でもう二度と繰り返し得ぬ事柄であると云うのは、種々変化する気象の下に生きる日本人の思考として当り前の事なのであろう。

年々歳々花は同じからざる花を咲かせるが、同じからざるは花のみでなく、人も又同じからず、物象すべてこれ同じからずであり、あらゆる存在が一期一会的様相を呈して居るのである。

又長い日本列島には寒流暖流が複雑に働きかけるし、魚等も南の魚、北の魚とその種類も様々であり、可愛い声を聞かせる小鳥も南北から甚だ多く集まるし、風景も山あり谷あり平野ありで、それが細長い列島であって見れば海にも近く、複雑に入り込んだ海岸線の変化と合せて驚く程のバリエティの多様さを見せる。更に又四季の変化がはっきりしていて、その四季折々の眺めも良いし、万事が変化に富み、複雑な多様さを一まとめにして日本の環境が出来上っているのである。

かかる所から日本美術に種々の様式が生れ変化の多い芸術を見せるが、それは決してどれが本物で他は偽物と云うわけではないと云う理も明らかだと思う。歐州の各都市を巡回展示した際のヨーロッパの批評家の疑問に対して斯様に回答する次第である。

併し物の不動を基礎とし、同じ状況の繰り返しから抽出して来る科学的思考には全

く弱いのは致し方のない事である。此の点に於ては歐州の人々に一步をゆづらねばならない。

我国の芸術には受容的な性格が強く、第二藝術的であるのもかかる氣候風土の下では、勢い突發的状況に対して受身で対処せざるを得ず、自ら積極的行動を起す事は不可能である故で、画家や彫刻家を見てもヨーロッパの人達は大作を悠々とこなし、驚くべき多作で正に画家と云い、彫刻家と呼ぶにふさわしいが、我国の作家はどうも寡作であり又小品ばかりに安住しているし、作品丈で生活出来ぬ所から別に糊口の為のアルバイトと称する内職に精を出すと云う次末で、趣味に藝術づいている様でもあり、第二藝術的と呼ばれても仕方がない人々が大変に多いのである。

更に又、画壇の様子を見ると可成りジャーナリズムに持ち上げられ、一方の雄の如く思われて居る作家も一皮むけば何の事はない、ヨーロッパの傾向等の二番煎じ丈であり、それも極めて近視眼的に、つい目の先にちらついている真新しい様式丈にうつつを抜かすと云う御粗末である。

嘗てアカデミズムが批難されたのは、権威を高めようとしてそれが内容面に迄及ばれず、空虚な形式の残骸を見せたからで、近頃では一見前衛藝術であるかの装いをこらした作風のものに、魂のこもっていない抜け殻を安易に身にまとっている態のものが多く、安易な借り衣丈に又脱ぎ捨てるのも早く、次々と二番煎じの前衛的モードを見せて恬として恥ない。かような事柄が見抜ける批評家も我国に少ないと云うのも、大体美術史を少々学んだ程度では美の本質等中々分らぬものであるから無理もないとは思うが、それにも増して批評家と雖も受容的性格を備えた日本人であって見れば又止むを得ぬ事なのであろう。相当な批評家がこれ又可成り優秀な作家を賞めたとなると一段下の批評家達はこぞって太鼓もちを勤めると云うのも面白い。反対に一度悪評が流されるや、これに棹差して船を進めるは容易の様だが、流れに逆らって良い評価を与える事の少なきに驚く。

封建制度が確立し、徳川幕府が300年の永きにわたって支配し得たのも受容的民族の故であり、万事合理化された筈の現代日本でも親分子分の関係は殊更強いものがあるうし、長いものには巻かれ式が未だに見受けられる様である。

併し此の第二藝術的な日本人の性格にも中々捨て難い良さも多々あるもので、世界に通っている「柔道」等は相手の力を利用して敵を投げるわけで、次々と襲いかかる気象の変化に立ち向う日本人が、瞬間的に与えられた状況に対して、素早く反応し、変り身の早さで対処して行く其の柔軟迅速ぶりが良き面に生かされ、日本人の武道として世界に類まれな『受けて勝つ』闘いの方法として柔道が出現したわけである。

又しても、余りにも外国崇科の好きな日本人として当り前かも知れぬが、「禪」と云う独特な宗教が日本にあるが、それが我国の内に在る時は然程の関心も示さなかつたものが、一度欧米諸国人達にもてはやされるやこぞって此れを称え、逆輸入に忙しいと云う次末ではあるが、この禪なるものは、坐禪に依つて雑念を払い無心の境地に達しようと云うものだろうが、『無心』とか『無』等と云う事は即物的に物事を解釈するヨーロッパの人達には相当な驚ろきであったに違いない。彼等は有の世界に住んで居り、物質はその時々の変化を見せるが、併し無に帰するわけではなく、表面的に形を変え、エネルギーは分散し又集合するが、其の総量は決して変動がない。

かかる意識体系の下にある欧米人には最初禪の『無』なる境地は、彼等の体系の丁度裏側を見せられたわけであろうから、驚きの余りこれに飛びついで分析を試みたのも尤である。

この『無』なる境地であるが、誠に日本の発想と云わねばならない。気象変動が中々予測をゆるさぬ日本であるが、又秋には大型の台風が次々と襲って来るし、細長い日本の国は又世界に名だたる地震国ですらあって、これら大自然の暴力が突如としてもたらされるや、多くの人々は生活の道を断たれ、甚しきは生命すら失うに至るわけで、かような状況の激変に対処する為には、何かとらわれて居っては状況的確な判断を欠くわけで、心を『無』の状態に置き、何物にもとらわれざる明鏡止水の状態で万象を写し取る様に明確に把握して、一瞬の後には迅速な変り身を見せねばならぬわけであろう。（禪にはそれ以上の深遠な世界のあるのは勿論だが今はこれに触れぬ）

坐禪で無心の境地に至ると云うのも、それなりの生活上の要求があったればこそであろうか。禪こそは誠に見事な、日本人の受容的性格から生み出されたものとして世界に誇って良いものであろう。殊に洋の東西を問わず、現代は甚だしく種々の雑音や不条理が向うから不意に訪れる様相に満ちていると云うのであるから、禪はもっと今後に必要とされ、広められて行く要素があると云える。

次に茶道とか生花等も我国の婦人達の間に深い根を張っているものであるが、これ将に第二藝術であって、誰しも皆茶道で身を立てようとか、華道で生活しようとは考えないで、ひたすら自己の生活を第一義に考え、日常生活に美や深いおいを齎らし、その事に依つて精神的栄養が生活の一つの原動力とも成つてより良く生きて行こうとする心の働きに外ならぬものであろう。勿論、茶道や生花の師匠としてそれ丈で生活している人が居るわけであるが、大多数の人々は生活が第一義的であって茶や花は第二義的であるのだ、第二義的であり、第二藝術であるからこそ、生活と云う第一

義なるものに戦いをいどまれる事もないし、むしろ生活の場に歓迎され保護され、着実に根を張って枝葉を存分に茂らせる事も出来たわけで、これ受容的第二藝術的あらわれが第一義なるものの奥深く、染み入る様に入り込んで遂に第一義的なるものと一体化してしまったわけで、こうなると第二藝術なるものは他の如何なるものからの脅威もなく、命を永らえ得るのであって見れば、残された課題は今後如何にその藝術の内容を高めるかと云う一点丈であろう。この後は最早第一藝術を恐れる事もなく、柔軟性を生かし迅速な適応力と云う武器を以て対処するのみであろう、さうすれば我等日本人の前途にも洋々たるものがあるのだ。

確かに第一藝術である歐州人の作品はスケールが大であり、頑丈で厳しい世界があるが、第一藝術は強烈な自己主張をして、生活等は捨ててかかる手合いが多く、遂には生活を破壊し、自然の外に出で天涯孤独と成るものだ。更に歴史と闘い社会に背き遂には作家その人が死をもいとわず、この世に別れをつげるに至っては最早立派な作品はおろか下らぬ作品すら生れぬわけで、此處に第一藝術の危険があるわけであるが、第二藝術には左様な危険もなく、命を永らえてやがては傑作を物にする事も可能なわけであり、俗に云う『柔よく剛を制する』次第である。大体生活と隔絶して藝術丈が単独で存在し得たとしても、其處に藝術の存在を認識する人間と云うものが居なかつたならば、結果的には藝術が存在しなかった事と何等変りはないのである。第二藝術が第一藝術を凌駕し得るのはかような面に於てであり、单なる二番煎じの亜流に甘んずるのは日本人の欠点ではあるが、受容的性格を良い意味に生かし、吾にないものを摂取消化し、これにヨーロッパにはない吾等独自のものも生かして見事な藝術の開花に迄持つて行く事が可能であり、又少数の優れた藝術家は此の事を解決しているのであって見れば道標は立てられているのであり、大いに希望の持てる事なのである。

日本藝術の全体を眺めた場合、ヨーロッパ藝術との大きな相違の一つに甚だ纖細で且器用であるのを見い出しが、これも状況の突発的变化に柔軟に対処する日本人の生活が素早い変り身で応する姿勢の結果であり、その為に皮相的な器用さや手工芸的纖細さが、職人的練達さと云った点から並ぶ者なさ技巧を見せるが、これが大藝術に無縁の存在と成り、安易な場から抜け出る事の出来ないのは欠点の大なるものであり、こう云つた実状を多く見る事と成るのは誠に遺憾の極みである。

纖細で器用な日本的美感を大藝術に迄高め得るのは一体如何なる方法に依らねばならないか、粗いものは物と物の間隙に入り込み難いわけだが、これが微細なるものは良く物の間隙に侵入し易く、更に自己を『無』にして微に入り細をうがって幽玄微妙

なところに迄滲透して行く様な、柔らかで澄んだ深さの状態、至純の境地とも云うべき些かも雑念、私意にとらわれぬ感じある。玄妙なる世界に入るにはこう云った事が必要で、単に細いとかシャープであると云うのでは何か直線的に限定された感や、鋭さが身を傷つけると云った不都合を思わせ、限界内の出入が行われるのみで無限なる世界に遊ぶ事は不可能と成るものである。

老・莊の「虚」や禪の「無」の思想もモンスーン地帯に生きる東洋人の受容的性格を最高度に發揮して、それを極めて深いものに作り上げて行ったわけである。

今後、東と西の美術は如何なる変容を見せて行くのであろうか。洋の東であれ西であれ命題は同一であろうかと思う。その理は真理は同一なる原理に貫かれている筈であって、此處迄は適合するが、其處から先は背馳して合一の和が無いと云うのは必ず相対的範囲の現象であり、全的、合一的な絶対觀から外れ、単に真理の側面に触れた程度で、真理そのものを把握した事とは成り得ぬものである。

科学が次第に発達し、それに伴って種々の交通機関が網の目の如く世界を包みこみ、時間と距離をいちぢるしくせばめて行きつつある現代に於ては、如何に東と西の芸術風土が異り、それぞれの伝統が相違していようとも今後ますます御互の影響を受けつつ短を補い長を延ばして行くのであろうが、結果的には優れた芸術は似た様な道をたどって、国境、人種の別に依る芸術様式の相違も段々減少し、眞の意味での個性が求められて来る事であろう。

東西の交流が激しく成って行く場合、留意すべきは、吾國の場合、逆輸入の愚を冒してはならない。近頃の海外旅行者が、外国の土産を喜んで買って来て帰国後良く良く見たら何と裏に小さく、「MADE IN JAPAN」と書いてあった等の話は良く聞く例であるが、芸術に於ては左様な誤りはゆるし難いのであって、特に前衛・抽象派に指摘し得る多くを見るのである。

芸術の逆輸入の問題に深く入る事は此の文章のテーマから云って偏重の嫌いがあり、余り取り上げぬ事とするが、大体ヨーロッパに起った前衛・抽象等は東洋に触発されて生れた印象派、後期印象派等からの連鎖反応が今日に及んで居る事を考えると一目瞭然であろう。

芸術の逆輸入は恰も血族結婚の如きもので、大きな変容は望み得ないし、場合に依るとマイナス面ばかり露呈される欠陥もあり寒心に堪えない。

ヨーロッパの作家は此の点實に良く心得たもので、彼等一流の合理精神から爛眼にも東洋の異質な芸術要素を導入し、これを西の科学的性格の所産である写実力に大きく付加して合一的世界を創造しようと図ったもので、流石に第一芸術の見事さを維持

し得るものと云わざるを得ない。

然らば東の吾々は一体如何すべきか？此の問に対する回答も自ら明白になろう、すなわち自己の東洋的資質はこれが根幹であると為し、其の深い精神性や形而上学的資質は大いに尊重せねばなるまいが、この東洋と云う樹木を豊かに茂らせ一層大きく成長させる為には、西の人達と同様に自らに欠ける要素を導入し、合一の和を生んで全的世界を生成せねばならない。つまり東に欠ける所の科学性、合理的所産である所の写実的描写力を充分自家菴籠中のものとし、物質の外面を冷静に判断し得る客観的再現力を充分に把握しなければならない。

客観的再現能力は云わば遠心力的性能とも云い得るもので、此れに対して主觀的、形而上学的な精神性と云う道をたどるものは求心力的性能と云って良く、両々相俟つて真理世界が生成されるので、吾が太陽系に於てもこの遠心力と求心力が丁度釣合つて、些かの過不足もなくミゼロミの状態である故に永遠の運行が営まれ、人間はもとより森羅万象の存在があり得るもので、若し微少の差でも求心力が強ければ太陽に引き付けられて、其の甚だしい高熱の為に焼き尽されてしまうであろうし、反対に遠心力が勝てば地球等の惑星は何億光年の彼方に飛ばされ、何れかの星に激突して消滅の運命をたどるもので、丁度相反する性能の力が釣合うと云う処に真理があると云うのは宇宙の在り様を探れば明白であり、美の世界もこれを適用して誤る筈はないものと思う。『美に於ける東と西』の世界は別々に分離される事なく、それぞれの美質を最大限に發揮して釣合わねばならない。それが真理 자체であるからには。